



林田直也撮影

むらかみ・やすかず 1957年12月、広島県尾道市生まれ。近大福山高から近大に進み、和歌山相互銀行(当時)時代は、83年世界選手権の混合ダブルスに出場。90年から日本生命女子卓球部監督を務め、2000年、07年には国内主要4大会を制するグランドスラムを達成。昨年4月から総監督。

「企業などにスポンサーになってもらい、現在、1

20台ほど寄付していま

す。ラケット4本とボール

を含めて一式10万円。スポ

ンサーになってくれる企業

は少ないので、目標は1

000台。指導者も派遣し

ています。みんなに卓球選

手になってほしいわけでは

ないけど、卓球はすぐにう

まくなるスポーツ。最初に

卓球をやることによって、

練習したらうまくなるとい

う感覚をつかんでほしい」

少子化でどのスポーツも

競技人口が減るなかで、卓

球は増加している。国際舞

台での躍進が大きな理由



日本生命女子卓球部総監督

村上 恭和さん 60

目標は明確だ。強豪の中国を倒して日本卓球界初の五輪メダルを獲得すること。村上恭和さん(60)は2012年ロンドン五輪で日本女子代表チームを率い、日本に初の五輪メダルとなる銀メダルをもたらし、続々オデジャネイロ五輪でも銅を獲得。ほとばしる卓球への情熱から生まれる発想力、創意工夫で、現在はジュニアの育成にも力を入れる。

(編集委員 大月達也)

やさしさと、希望を込めつづられた特注の卓球台だ。4、5歳の子供用に、広さは公認台の7割程度、高さを10センチ低くし、四隅も丸くした。昨春、一般社団法人「卓球ジュニアサポートジャパン」を設立し、全国の幼稚園、保育園に贈るプロジェクトをスタートさせた。

「企業などにスポンサーになってもらい、現在、120台ほど寄付しています。ラケット4本とボールを含めて一式10万円。スポンサーになってくれる企業は少ないので、目標は1000台。指導者も派遣しています。みんなに卓球選手になつてほしいわけではなくけど、卓球はすぐにうまくなるスポーツ。最初に卓球をやることによって、練習したらうまくなるといふ感覚をつかんでほしい」

少子化でどのスポーツも競技人口が減るなかで、卓球は増加している。国際舞台での躍進が大きな理由

だ。「福原愛や石川佳純、水谷隼たちのおかげですかね。みんな3歳から卓球やっているとか言っているので。また、高齢者も増えている。人と人がぶつからな

いなど、球技の中でも一番安全だと思っています」

広島県尾道市の向島で生まれた。野球少年だったが、小学6年の時に卓球と出会い、中学から本格的に始めた。市内の新人戦で優勝し、高校でもインターハイなどで実績を積んだ。そんな中で、挫折も味わった。近大卓球部では3年生の秋にキャプテンになったが、4年生の4月にはキャプテン交代を告げられた。

「主将になつていろいろ改革したいことがあつたのに、ちょうど監督が代わって、それまでの主将中心のチーム運営が、コーチ主導になつた。キャプテンをやめてからは、ほとんど練習

だ。「福原愛や石川佳純、水谷隼たちのおかげですかね。みんな3歳から卓球やっているとか言っているので。また、高齢者も増えている。人と人がぶつからな

いなど、球技の中でも一番安全だと思っています」

自分で考えて、行動できる選手育てる

日本生命では、6年で日本リーグで優勝させると宣言し、その通り、1995年に初優勝。翌年から日本女子代表の「コーチについて

改革したいことがあつたのに、ちょうど監督が代わって、それまでの主将中心のチーム運営が、コーチ主導になつた。キャプテンをやめてからは、ほとんど練習

取材後記 村上さんのやることば、何でも徹底していく。冒頭で紹介

付するラケットには、一流の選手が使うのと同じラバーが貼つてある。一般的のことは球の弾き方が全然違うといい、最初から本物を使ってほしいという、こだわりがある。

一昨年から拠点にしている日本生命体育館は、卓球用の風が出ないクーラーを設置し、床は半分が国内試合用の板敷きで、もう半分は国際試合用のマットが敷いてある。もともとは1964年東京五輪金メダルの「東洋の魔女」の拠点だった日紡(現ユニチカ)の跡地に建てられていたバレーボール用のものを改修した。新たな伝説をつくりたい。

手の強化もはかつている。「(卓球の)塾と考えていたし、家を売つて出てきた。卓球で飯を食うしかないですから。市内の銭湯を改築した古い卓球場で3年くらい教えました。最初の3か月は誰も来なかつたんですけど。高校の部活動や、ママさんスクールでも教えていたんですけど、そこに日本生命女子卓球部の監督就任の話が舞い込んだんだ

任。現在は、大阪府貝塚市の日本生命体育館を拠点に、「ジュニアアシスト卓球アカデミー」を開設し、トップレベルのジュニア選手の強化もはかつている。

16年に日本代表監督を退任。現在は、大阪府貝塚市の日本生命体育館を拠点に、「ジュニアアシスト卓球アカデミー」を開設し、トップレベルのジュニア選手の強化もはかつている。指導の中で一番大事にしたのは、自分で考えて、行動できる選手を育てること。1分間スピーチをさせたりもしました」

銀行では中心選手として活躍し、監督兼任までやつた。だが、30歳を目前にしてそろそろ引退して銀行業務に専念するという頃に、一大決心をする。

「卓球から離れて生きていいく気がしなくてね。みんなの反対を押し切つて大阪に出てきて、フリーライブの指導者になつた。結婚して子供が2人いたし、家を売つて出てきた。卓球で飯を食うしかないでした。結婚して子供が2人いたし、家を売つて出てきた。卓球で飯を食うしかないですから。市内の銭湯を改築した古い卓球場で3年くらい教えました。最初の3か月は誰も来なかつたんですけど。高校の部活動や、ママさんスクールでも教えていたんですけど、そこに日本生命女子卓球部の監督就任の話が舞い込んだんだ

と、北京五輪後の2008年10月には監督に就任。ロンドン五輪で日本卓球界初のメダルを取るために、改革に乗り出した。

「まず、代表選手の選考基準をクリアにするため、五輪の1年前の世界ランキン

グで代表を選ぶことを明

言した。また、ふだん見て

東京五輪 初の「金」を